親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討 (2)

—父親自身の育児行動及び育児ストレスと父親アイデンティティとの関連—

○山下倫実・石田有理・加藤陽子
(十文字学園女子大学)

キーワード：親アイデンティティ，育児ストレス，育児行動

Exploratory Study on Factors that Contribute to Parental Identity

Tomomi Yamashita, Yuri Ishida and Akiko Kato

(Jumonji University)

Key Words: Parental Identity, Parental Stress, Parental Behavior

目 的

本研究の目的は、幼い子どもを持つ親が「親としてのアイデンティティ(以下、ID)」を獲得していく過程を明らかにするために、どのような要因が関連するのかを探索的に検討することである。

岡本(1996)によれば、個としてのIDと母親IDを両立している統合型が家庭生活に満足し、夫からよく理解・受容されていると認知し、家族に対して積極的に関与するという。つまり、個としてのIDに加え、出産に伴う新たな役割を受容し、親IDが無理なく獲得されることが、夫婦関係や子育ての環境を整えることにつながると考える。ただし、出産後には家事や子どもの世話にかかる時間は増え、職業生活とのバランスを取ることは難しくなり、経済的な負担も重くのしかかることになるため、親IDの獲得は容易ではない。

これまで、配偶者からのサポートが多いほど、抑うつ傾向が低く、夫婦間での問題解決がよく行われ、結婚満足度も高くなることから、配偶者からのサポートは家庭生活に良い影響をもたらすことが示されている(Katz et al.,2000)。子どもを含めた家庭生活が円満で、親としての役割を果たせば、親ID獲得が促進されると考える。

しかし、父親の育児は母親の育児と比べると、一時的、補助的な、いわば気が向いた時の育児となりがちで、そのような父親の育児のあり方が母親にとってのストレスを増大させる可能性がある(西尾, 2013)。一方、父親の立場からすると、母親と同様に育児自体が負担となったり、育児参加しているにも関わらず、母親に理解されなかったりするために、親としてのIDを持っていない可能性もある。

そこで、本研究では父親を対象に、父親自身の育児行動及び育児ストレスと父親IDとの関連を明らかにする。ただし、育児行動については、子どもが生まれる前の予想と、実際に子どもが生まれた後の行動の両方が父親IDと関連があると予測されるため、この両者を取りあげる。

方 法

【調査協力者】平成29年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在3歳未満の子どもが1名のみの家庭を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施。200名(男性100名、女性100名)が分析対象者。平均年齢は35.78歳($SD=5.58$)であった。

【質問項目】1)家庭環境に関する項目、2)夫婦関係満足度については、親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討(1)と同様。3)父親の育児ストレス;清水・関口(2010)の「育児ストレス尺度(CSS短縮版)」の16項目について5件法で測定。ただし、「父親支援のなさ」という下位因子については父親が回答できないため、「妻は子育てに関して自分を必要としていないのではないかと思う」、「妻が一家を支える自分の苦労を理解してくれない」、「妻が夫である自分よりも子どもの生活を優先することに対して不満に思う」、「妻の子育ては自分の理想の子育てと違っている」という4項目を新たに作成。信頼性は心身の疲労($\alpha=.848$)、育児不安($\alpha=.904$)、母親支援のなさ($\alpha=.910$)であった。4)父親自身の育児行動の評価;出産前の予想と、出産後の実際の育児行動について、西尾(2013)の父親育児行動リストを基に、新たに父親支援4項目を加えた計15項目について5件法で測定。信頼性は対子ども支援(前 $\alpha=.923$, 後 $\alpha=.835$)、対母親支援(前:

$\alpha=.892$, 後 $\alpha=.922$)であった。5)父親ID;山口(2010)の親ID尺度、母親IDを参考に、17項目を選定し、5件法で回答を求めた。信頼性は親としての自信のなさ($\alpha=.862$)、親としての効力感($\alpha=.811$)、個人IDと親IDの混乱($\alpha=.751$)であった。

結果と考察

父親ID(自信のなさ/効力感/混乱)を基準変数とし、Step1に家庭環境変数(6)、Step2に出産前育児予想(2)、出産後育児行動(2)、育児ストレス(3)を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。投入された変数と標準偏回帰係数を表1に示す。解析の結果、自信のなさの分析における説明率は42.5%で、説明率の検定は1%水準で有意であった($F=25.39$, $df=3,96$)。また、効力感の分析における説明率は46.3%で、説明率の検定は1%水準で有意であった($F=22.35$, $df=4,95$)。さらに、混乱の分析における説明率は42.9%で、説明率の検定は1%水準で有意であった($F=15.87$, $df=5,96$)。

結果より、父親自信の年齢が若いほど、心身の疲労や母親の理解のなさによるストレスが高いほど、父親としての自信を失っていた。また、子どもが生まれる前に育児参加の意思があったほど、そして現実には母親や子どもに対する支援を行なっているほど、親としての効力感を高めていた。母親の理解のなさのストレスが低いこともまた、親としての効力感を高める要因となっていた。最後に、子どもが生まれる前の育児参加意識が低く、実際には母親や子どもに対して支援をしていると評価しているほど、母親の理解のなさによるストレスが高く、心身の疲労のストレスが低いほど、個人IDと親IDが混乱していた。つまり、育児の負担が予想より重く、そんな苦労を母親が理解していないと評価する場合、心理的健康を保つために「子育てより自分の生きがいを追及していても親としては一人前」といった矛盾するIDを獲得してしまう可能性がある。

表1 家庭環境、父親の育児行動、父親の育児ストレスが親IDに与える影響

説明変数	基準変数		
	親としての 自信のなさ	親としての 効力感	個人IDと親ID の混乱
Step1			
年齢	-.168 *		
配偶者の年齢			
結婚期間			
世帯収入			
本人の収入が占める割合			
Step2			
夫婦関係満足度			
心身の疲労	.151 †		-.167 †
育児不安			
母親の理解のなさ	.542 **	-.273 **	.346 **
対子ども支援予想		.221 *	
対子ども支援現実		.230 †	.255 *
対母親支援予想			-.207 *
対母親支援現実		.272 **	.575 **

引用文献

親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討(1)と同様であるため省略
(本研究はH28年度十文字学園女子大学のプロジェクト研究費の助成を受けて実施された)